

平成 27 年度 海外研修報告書

日本リハビリテーション医学会
国際委員会委員長 青木 隆明
海外研修担当委員 井口 はるひ

平成 27 年度日本リハビリテーション医学会海外研修助成による研修が終了したので、下記の通り報告する。

記

松瀬 博夫 (久留米大学病院 リハビリテーション部)

訪問研修施設名 : University of Kansas Medical Center, Department of Rehabilitation Medicine

所在地 : Kansas City, USA

訪問期間 : 平成 27 年 6 月 15 日～平成 27 年 6 月 20 日

訪問研修の成果 : 訪問した University of Kansas Medical Center の Segal 教授は、筋骨格系のリハビリテーションが専門です。臨床研究テーマのひとつである、変形性膝関節症の疼痛軽減、機能改善、進展予防に関する研究を紹介していただき、最近の見解に関して議論を交わしました。その中で、膝関節の動揺性と筋力の関係、また運動時に拮抗筋に生じる Co-activation の意味とそれらに対する運動効果に関して新しい知見を得ることができました。さらに、変形性膝関節症の進行予防をテーマとした運動療法の開発に関して、カンザス大学との共同プロジェクトを立ち上げることになりました。臨床では、spine center を見学しました。大きな施設ではありませんが、診察室、レントゲン、透視室、CT、訓練室などからなり、同じ施設内で脊髄損傷や脊椎症による機能障害と疼痛に対し、診断、疼痛コントロール、リハビリテーション、患者教育などすべてが行われ、患者にとってとても効率的に診療が行われていました。他には、最新の設備を備えたリハビリテーション病棟を見学しました。

千田 譲 (小牧市民病院 神経内科・リハビリテーション科)

参加会議名 : 24th European Stroke Conference (ESC)

開催地 : Wien, Austria

参加期間 : 平成 27 年 5 月 13 日～平成 27 年 5 月 15 日

発表演題名 : Impact of leukoaraiosis on convalescent rehabilitation outcomes of patients with different disease types of ischemic stroke

発表の成果 : 脳梗塞に対する回復期リハビリテーションにおいて、入院原因となった脳梗塞部位以外の大脳白質病変が、その治療成績に影響を及ぼすこ

とを発表した。

以前論文で発表した内容の症例数を増加させ検討することで、大脳白質病変のパターンにより運動機能・認知機能それぞれに低下させる因子であることを報告した。有意義な議論がなされ、そこから今後もさらに研究を発展させ、リハビリテーションの臨床現場へのフィードバックにつながる有用な情報も得ることができた。

石原 健 (京都地域医療学際研究所 がくさい病院)

参加会議名 : 9th World Congress of the International Society of Physical and Rehabilitation Medicine (ISPRM 2015)

開催地 : Berlin, German

参加期間 : 平成 27 年 6 月 19 日～平成 27 年 6 月 23 日

発表演題名 : Muscle Activities during Practice with Balance Exercise Assist Robot

発表の成果 : これまでのロボットリハビリテーション研究の中で、バランス練習アシストロボットが人体に及ぼす影響を電気生理学的に明らかにした内容を、自身の目標の 1 つであった国際学会で発表することができた。学会の多くのセッションや演題でロボットリハビリテーションはトピックのひとつとなっており、世界的にも今後の発展性を感じることができた。また、同時に治療適応の見定めや治療根拠を示していくことの必要性が国際的にも注目されていることが理解できた。今後のさらなる研究をすすめるために、非常によい刺激になった。

蜂須賀 明子 (産業医科大学 リハビリテーション医学講座)

参加会議名 : 62nd Annual Meeting of the American Association of Neuromuscular & Electrodiagnostic Medicine

開催地 : Honolulu, Hawaii, USA

参加期間 : 平成 27 年 10 月 28 日～平成 27 年 10 月 31 日

発表演題名 : Repeater F-waves may be derived from reinnervated type I motor units in polio survivors

発表の成果 : ポリオは反復 F 波が増加し運動単位減少を反映すると報告した研究の続編として、今回は 1) ポリオの反復 F 波は潜時が遅く高振幅で、神経再支配されたタイプ I 運動単位を起源とする可能性がある、2) ポリオの臨床重症度に応じて、まず反復 F 波が増加し、次いで F 波出現率が減少する、以上 2 点を発表した。議論では、ALS など他の運動ニューロン疾患への応用が期待された。今後も病態評価が訓練や装具導入などのリハ治療に役立つ、リハ医らしい電気診断を目指して励みたい。